

2025 年度

国語

最初に、以下の注意事項をよく読んで下さい。

1. 問題冊子は監督者の指示があるまでは開かないで下さい。
2. 監督者の指示にしたがって、解答用紙に受験番号と氏名を記入して下さい。問題冊子は受験番号のみを記入して下さい。
3. 試験問題の内容に関する質問には応じません。それ以外の用事があるときは、手をあげて下さい。
4. 受験中気分が悪くなったときは、監督者に申し出て下さい。
5. 問題冊子および解答用紙は持ち帰らないで下さい。
6. 字数制限のある問題については、句読点なども1字として数えるものとします。

|              |  |
|--------------|--|
| 受験<br>番<br>号 |  |
|--------------|--|

【一】 次の各問いに答えなさい。

問一、次の①～⑥の傍線部のカタカナを漢字に直し、漢字には読みがなを書きなさい。

- ① 通信のリレキを調べる。
- ② けがのチリヨウのため通院する。
- ③ いつか必ずオヤコウコウをしたい。
- ④ 決勝戦が明日にヒカえている。
- ⑤ 山麓の村を訪れる。
- ⑥ 彼の演奏はシュウイツだった。

問二、次の中から「問答無用」と似た意味を表すものを二つ選び、記号で答えなさい。

- ア、本末転倒
- イ、色を失う
- ウ、頭ごなし
- エ、太鼓判
- オ、自明の理

問三、次の（ ）には「状況がいきなり変化し、解決に向かう」という意味の四字熟語が入る。その四字熟語を漢字で答えなさい。

廃部寸前だった部に新入部員が十人入ったことで、（ ）、部の存続が認められた。

問四、次の（ ）に適切な漢字二字を入れ、慣用句を含む文として完成させなさい。

- ① （ ）にものが挟まったような説明で納得できなかった。
- ② 社長が（ ）を示している限り、この企画は実現しないだろう。

【二】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「わたし」は、宮城県石渡市の海辺の町に住む。「わたし」の母は、結婚を機に東京に出たものの、「わたし」を産んですぐに離婚し、石渡の実家に戻ったところ、「わたし」が一歳のときに東日本大震災が起り、「わたし」の祖母とともに亡くなってしまう。以来、「わたし」は祖父と母の妹である汐里さんと暮らしている。「わたし」が小学六年生になったばかりの四月、汐里さんは結婚して結婚相手の陽介さんのいる東京に引っ越すと告げる。「わたし」は汐里さんが家から出ていくことを受け入れられず、「おめでとう」と言うことができないまま約一ヶ月が過ぎた。明日は汐里さんの引っ越しの日だ。」

最後の日はあつという間に、本当に拍子抜けするくらいあつさりとやってきた。

夜、おじいちゃんと汐里さんとわたしで、いつものように夕ごはんを食べた。このあいだのお祝いとはちがつて、ごくふつうの、地味なメニューだ。

料理はみんなわたしが作るはずだったのに、実際はかなり汐里さんに手伝ってもらった。それでも味噌汁はやっぱりなくなり、キュウリの浅漬けは味が薄くて、ごはんも 1 でおいしくなかった。

次、三人でごはんを食べられるのはいつになるだろう。結婚前、汐里さんが実家で食べる最後の夕食なのに、なんでわたしはこんなひどいものしか作れないんだろう。

考えると悲しくなつて、わたしは無言でごはんをかきこんだ。汐里さんはにこにこしながら、おいしい、といってくれたけど、うれしくなかった。おじいちゃんは今日ものすごいスピードで食事をすませて、最後の一言、味噌汁しよっぺえな、といった。ごちそうさまをして、みんなでお茶を飲んでいると、急におじいちゃんがテレビの下を 2 しだした。

「汐里。これ、もってけ」

汐里さんの前に置いたのは、細長い木の箱だった。

「おまえにやる。よく切れるぞ」

なかから出てきたのは包丁だった。汐里さんはちよつとびっくりしていた。なんで包丁？ とわたしも思った。

「あ、ありがとう」

「陽介くんが浮気したら、優しく刺してやれ」

にこりともせず冗談をいうのは毎度のことだけど、さすがにぎよつとした。でも、汐里さんと顔を見あわせた瞬間、急におかしくなって、いつもみたいによく笑えた。

それからお風呂に入って、ふだんよりだいぶ早く自分の部屋にもどった。あんまり長く汐里さんといると、かえってつらくなる。本当に、自分でもあほだと思うけど、わたしはまだ心のどこかで、結婚やめたと汐里さんがいいだすことを期待していた。

そんなこと、絶対ないのに。信じるだけ、無駄なことなのに。

ああ、<sup>①</sup>これで終わりだ。

明日の夜、汐里さんはもういない。結局わたしは最後まで、おめでどうをいえなかった。ベッドに転がった瞬間、大きなため息が出た。

最低だ、わたしは。さんさんお世話になったのに、お祝いの一言もいえないなんて。

朝なんて、来なきやいいのに——そう思った瞬間、涙が出た。ほおを伝って、くちびるの端から入ってきた生ぬるい涙は、海の水よりずいぶん塩からかった。

ノックする音が聞こえて、目がさめた。

時計を見ると、午前四時半だ。ベッドにあおむけになっているうちに、いつのまにか寝ちゃったみたいだ。

こんな時間に、いったいなんだろう？ 目をこすりながら返事をする、と、ゆっくりドアが開いた。隙間から、<sup>だいたいいろ</sup>橙色の照明がとろりと差しこみ、部屋の前に汐里さんが立っていた。

「ごめんね、おこしちゃって」

眠気が一瞬で吹つとんだ。わたしは 3 首を振った。

「汐里さん、どうしたの？」

橙色の光を背にして、笑みを浮かべた汐里さんの顔は、なぜか少しだけ緊張して見えた。そして、着ている服装に気づいて、はっとする。薄いブラウンのおしゃれなコートに白いマフラー。今にも家を出る直前のような格好に、もしかして、と思った。予定が変わったんだらうか。もう出発しちゃうの？ わたしはぎゅっと右手をにぎった。

②「最後に、海、見たくなっちゃって」

汐里さんはにっこり笑った。

「なっちゃん、いっしょに行かない？」

考えるまでもなく、わたしはうなずいた。

③「外に出るとまだ暗かった。」

冷たい北風がまっすぐに吹いてきて、身震いする。歩きながら、そっと浮かべるように息を吐くと、青白いもやが大きく広がった。

「寒い？」

わたしは首を振った。振った瞬間、小さくしゃみが二発出た。ふふつ、と汐里さんが笑った。

「風邪、引かないようにね」

マフラーを外して、汐里さんはわたしの首に巻いてくれた。ふわりと首元が温かくなる。花束を溶かしたようないい香りがあった。汐里さんのおいだ。それだけで胸が熱くなり、わたしは白いマフラーを鼻先まで引きあげた。

なんだろう。

なんでわたしは、汐里さんといっしょにいられないんだろう。

ただ好きな人といっしょにいたいだけなのに、どうして叶わ<sup>かな</sup>ないんだろう。

車に入ると、汐里さんはすぐにエアコンを点けてくれた。温かい風が顔にあたり、ふっと気がゆるんだ瞬間、少し眠くなった。「寝ててもいいよ」

汐里さんはそういつてくれたけど、わたしは首を振った。冗談じゃない。いっしょの時間を、一秒でも無駄にしていたまるか、と思った。

それにしても、汐里さんはどこに向かうつもりだろう。

家から近い浜辺は護岸工事が行われていて、海が見えない。だから、おじいちゃんの漁港のほうか、日向山ひなたやまに行くのかな、と思った。けれど、汐里さんが車を停めた場所は、製紙工場の敷地をぐるりと回った先にある、だれもない海沿いの工事現場だった。

ドアをあけたとたん、磯のにおいが鼻についた。

でも、高さ三メートルはある防潮堤のせいで、海は見えない。なんでこんな場所に、と思ったけれど、汐里さんはとくに説明もせず、壁沿いの砂利道をゆっくりと歩いていった。

しばらく行くと、延々と続くコンクリートの壁が突然途切れた。幅二メートルほどのその隙間は、工事機材を運ぶ通路のようだった。明らかに勝手に入っちゃだめな感じだったけど、汐里さんは 4 進んだ。後を追ったわたしは、壁の先の光景を見て目をみはった。

海だ。

右手には乱雑に積みかさなったテトラポットが続き、その上に干からびた流木がぼつんとついている。足元には白い砂浜が広がり、木が燃えたような、生き物がくさったような、濃いにおいがした。そして、海は青じやなく、水色がかった白い光を帯びて、震えるようにかすかに、ゆらゆらと揺れていた。

汐里さんはゆっくりと波打ち際ぎわまで歩いていき、海の彼方かなたを見つめた。今朝の海はゆつたりとおだやかだ。わたしも並んで、だまって海を眺めた。

晴れた日の波の音は優しい。

どぶん、とこもった音がして、それから砂がやわらかく崩れるように、ざざーっ、と静かに響いて消える。この海が黒く染まって、屋根よりはるか高く盛りあがり、街を飲みこんでしまったなんてやっぱり信じられない。

わたしは汐里さんが海を見に来た理由がなんとなくわかった。

あんなことがあったのに、この町には本気で海を憎む人はあまりいない。広々とした海を見ると、わたしもお母さんやおばあちゃんとどこかでつながっているような感じがする。いつかこの町を出るとき——もし、そんなときが来ればだけど、わたしも最後に、やっぱり海が見たい気がする。

彼方でカモメの声がして、夜の底が橙色に染まりはじめたとき、

「なぎ姉ちゃんが——」

遠くを見たまま、汐里さんはぼつりといった。

「え？」

「なっちゃんのお母さんが結婚して、家を出るとき」汐里さんの声はかすかに震えていた。「わたし、うらやましかったんだ。いいなあ、って思った。結婚して外に出られるなんて最高じゃん、って。あのころはずっと思ってた。こんな町、いつか絶対、出て行ってやるって」

波の音と重なって、汐里さんの声は今にも消えいりそうだった。わたしはだまって（i）を澄ませた。

「ずっと、思ってたはずなのに」

わたしは息をのんだ。声を落としてこちらを見た汐里さんの目が、ほんの少し、大きくふくらんだ気がしたからだ。

「なっちゃん、ごめんね」

胸がうずく。わたしはあせった。だめだ。だめ。汐里さんはそんな顔しちゃだめなんだ。だって、これから、幸せになるんだから。絶対に、絶対に、幸せにならなきゃダメなんだから。

「いっしょにいらなくて、ごめん。おじいちゃんとふたりだけにしちゃって、ごめん。わたし、ほんとに——」

「しおりさんっ」心の底から、ありったけの気持ちをこめて、わたしはさげんだ。「<sup>④</sup>けっこん、おめでとうっ」

汐里さんはきよとした顔でこちらを見た。

よかった。やっといえた。

ほっとした瞬間力が抜けて、一気に涙があふれそうになる。

あわててうしろを向いて、思いつき奥歯を噛んだ。<sup>⑤</sup>泣くな、わたし。止まれ、涙。神さま、おねがい、今だけでいい。息を吐いて、吸って、また吐いて、奥歯を噛んで、くるっと回って——わたしは全力で笑った。

「汐里さん、わたしだいじょうぶだよ。ひとりでも、できるから。みんな、自分で、できるから」

朝日が射<sup>き</sup>してくる。太陽が昇る。朝なんか来なきやいいのにつて思っても、関係なしに太陽はまた昇る。汐里さんがわたしを抱きしめた。

「なっちゃん、ありがとう」

汐里さん。

汐里さん。

こっちこそ、ありがとう。守ってくれてありがとう。優しくしてくれてありがとう。いっしょにいてくれてありがとう。たく

さんたくさん、笑わせてくれてありがとう。

わたし、忘れないよ、今日のこと。

汐里さん、ずっとずっと、大好きだよ。

光が強くなる。赤やピンクや黄色や紫や、いろんな色をごちゃ混ぜにした光が、濃くなって、強くなって、海と町を金色に照らして、わたしたちを包みこんでいく。

この町の、世界一きれいな朝日のなかで、もっともっと、汐里さんが安心できるくらい、わたしは強くなりたいと思った。

（蒼沼洋人『波あとが白く輝いている』〈講談社〉より）



問一、

1 く 4

に入ることはとして適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。(ただし、同じものは使えない。)

ア、じんじん    イ、ごごご    ウ、ずんずん    エ、ごろごろ    オ、ぶんぶん    カ、ごわごわ

問二、波線部 a・b の本文における意味として適切なものを次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

a 「拍子抜けする」

ア、残念な気持ちになる

イ、短時間に感じられる

ウ、張り合いがなくなる

エ、落ち着いていられる

オ、驚きを隠せなくなる

b 「うずく」

ア、踊る

イ、高鳴る

ウ、痛む

エ、裂ける

オ、騒ぐ

問三、( i ) に入ることばとして適切なものを漢字一字で答えなさい。

**問四、**傍線部①「これで終わりだ」とあるが、この「終わり」について説明した次の文の空欄【 1 】・【 2 】に入ることばを、【 1 】は十一字で、【 2 】は四字でそれぞれ本文中から抜き出しなさい。

「わたし」が汐里さんに【 1 】まま、汐里さんが実家で過ごす【 2 】になってしまったということ。

**問五、**傍線部②「最後に、海、見なくなっちゃって」とあるが、汐里さんが海を見なくなった理由を「わたし」はどのように推測したか。適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

1、生まれ育った町の海は特別な存在なので、町を離れる前に、災害があつた事実も含めた海の姿をしっかり目に焼き付けて忘れないようにしたいから。

2、かつて町に大きな被害をもたらした海も、今ではすっかりおだやかな姿を見せていて、亡くなった家族に挨拶ができる唯一の場所になっているから。

3、以前は町を出たいと強く願っていたのに、今では離れがなくなってしまう、町や自分にとって大切な存在である海との別れも惜しくなっているから。

4、海から見る朝日はとても美しく、「わたし」との最後の思い出としてその美しい景色を共有することで、「わたし」に感謝を伝えられると考えたから。

5、海が身近な町に暮らす人にとって、海のせいでつらい経験をしたとしてもやはり海を嫌うことはできず、大切な人とのつながりすら感じられるから。

**問六、**傍線部③「外に出るとまだ暗かった」とあるが、暗い状態から変化しつつあることを表していることばを、十四字で本文中から抜き出しなさい。

問七、傍線部④「けっこん、おめでとう」とあるが、このようにさげんだときの「わたし」のようすとして適切なものを次の

中から一つ選び、番号で答えなさい。

1、おめでとうといえていなかったことを思い出し、今でなければ機会を失ってしまうだろうと思い、勇気をふりしぼっている。

2、町から離れたくないというのが汐里さんの本音だと気づき、前向きな気持ちで東京に行けるよう、無邪気に振る舞っている。

3、汐里さんといっしょにいたいという自分の気持ちよりも、汐里さんの幸せを願う気持ちや感謝の気持ちが大きくなっている。

4、汐里さんに謝られたことで自分が汐里さんを苦しめているのだと感じ、結婚を祝う気持ちがあるようにとりつくろっている。

5、いっしょにいたいという気持ちは汐里さんも同じだったので、気持ちが通じ合えたうれしさで、心から結婚を祝福している。

問八、傍線部⑤「泣くな、わたし。生まれ、涙」とあるが、「わたし」がこのように自分に言い聞かせている理由を三十字以内で書きなさい。

**問九、**本文中から読み取れる、汐里さんについての説明として適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、「わたし」を実の子どものように大切に思っていて、結婚前に「わたし」の希望を叶えようと尽力している。
- 2、結婚して新しい生活が始まることに興奮している一方で、ときに不安がっているようすを見せることもある。
- 3、今の家族の中心となつて家のことを行っているので、家を出ていくことに対してうしろめたさを感じている。
- 4、結婚で故郷を離れる前の最後の夕食でも落ち着いているものの、町や実家を離れることに葛藤を抱えている。
- 5、「わたし」の前ではずっと強がっていたが、離れ離れになってしまうことに耐えられなくなり動揺している。

【三】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

打ち言葉に埋没する生活を送る学生の中には、手書きの手紙<sup>1</sup> 1 メッセージカードをやりとりすることを非常に重視している者もいる。

① 女子学生Aは、大学に入学して一人暮らしになったとき、中学時代の友人と文通を始めた。手紙の内容は「最近嬉しかったこと」「気づいたこと」「自分と相手の環境がどう違うかなど、知りたいこと」「共有したい便利な情報」など、LINEでも連絡できることである。より早く連絡できるという点ではLINEが便利である。彼女の相手は、手紙を受け取った嬉しさをいち早く伝えたくてわざわざLINEで知らせてきたほどだ。

2 手書きの言葉には、LINEの打ち言葉にないものがある。書き手の筆跡、使う筆記具、消した跡など、書き手が意識していない情報を受け手が読みとることも可能になる。消した痕跡からは、書き手の心の動きも読み取れるように思えるほどだ。言い換えれば、フォント化された打ち言葉やありきたりの絵文字やスタンプ<sup>注3</sup>にはない書き手の個性が、文字と手紙には現れるのである。

彼女は便箋の裏に絵を描き添えることもしているのだが、「手元にある可愛い包装紙の絵」や「見てほしいアーティストの似顔絵」など、便箋に書いた内容とは関係がない絵を追伸のような感覚で描いている。書きたいことが沢山あって、枚数が五、六枚になってしまった時にふと裏面が寂しいことに気がついて、何か描いて白紙の部分を埋めようとしたのが始まりだそうだ。それはスタンプの絵文字にはない、彼女の個性や手間暇かけた痕跡が残ったものである。そのような手書きの手紙をやりとりすると、それは、交換する両者が、互いにかけてえのない特別な関係にあることを表している。そのためこの女子学生は自分の気に入った便箋を用意し、「文豪のように」万年筆で手紙を書いて、LINEで同じ内容を送った場合とは異なる印象や「特別感」を出すとしている。

手紙を受け取ったときは、返事を書くための便箋と封筒をあらかじめ用意しておいてから、手紙を読み、読み終わると同時に返事を書き出す。書き直す手間がLINEなどより大きいため、書く内容をあらかじめ定めておき、「頭の中で既に校閲してから」

一気に書き始める。訂正の手間を考慮するため、LINEに比べて書くときの注意度が増し、そのために文章表現も打ち言葉とは異なるものになっているという。

別の女子学生Bは、中学生のときスマホを入手して最初の誕生日に、友人からプレゼントと共に手書きの手紙を受け取った。それはX<sup>注4</sup>でお祝いメッセージをもらうより遥かに彼女を喜ばせたという。打ち言葉はメッセージを受け取ったら瞬時に、きれいな字と書き直しがわからないような文章を相手に送ることができる。しかしこの女子学生にとって、手書きの文字は、どんなものよりもそのときの相手の心情を表す不思議な力がある。これ以降、彼女は、お祝いや伝言を残すときは手書きをするように心がけているという。高校卒業時に文通を約束した友人とは今でも手紙のやりとりをし、旅行に行ったときは絵葉書にその日の感想と近況を書いて送る。相手も同様にしている。「その手書きのメッセージは毎日のLINEよりも感情が伝わることは間違いないと、その手紙を読むたびに感じる」のだそうだ。

建築を学んでいる彼女はCG画像<sup>注5</sup>より、著名な建築家のスケッチに魅力を感じている。図面の癖や消し切れていない書き損じは、「何年経っても色褪<sup>いろあ</sup>せない、建築に対するその建築家の活力」を感じさせるからである。そのため彼女自身も手書きにこだわ<sup>た</sup>り、設計図を描く課題では、パソコンのソフトウェアではなく鉛筆を使っている。太い線や細い線、点線などを使い分けて、建具や窓、壁を描き分けているという。

**B** 表現力や文章の細かで緻密な展開に欠ける打ち言葉の時代<sup>b</sup>でも、そのみに頼らず、相手への思いや配慮を込め長めの文章を推敲<sup>すいこう</sup>できる若い世代はいるのである。手書きの手紙やメッセージカードは、(貨幣を払えば誰でも同じものを簡単に購入でき、生産者や販売者の人格の痕跡をとどめることのない)商品ではなく、(顔の思い浮かぶ個性を持った相手との代替の効かないやりとりである)贈与の品なのである。パソコン万能のこの時代に手書きで図面を引くというのも、自らの個性やアイデンティティの痕跡を、他ならぬ手書きをすることによって残そうという試みなのである。

打ち言葉が生活の大半を占めるようになって、覚えておきたいことは手書きで紙に書き残すようにしているという女子学生Cもいる。手を動かして文字にする方が記憶に定着しやすiと感じるので、手書きを心がけているという。彼女も誕生日のメッセージカードや手紙は必ず手書きにしている。「手書きの文字は贈り主の感情やアイデンティティがこもっているように感じる

ため自分の気持ちを直接伝えたいときには手書きするようにしている」。

Cは手紙だけでなく、授業中、デザイン学科の学生としてデザインワークするとき、手書きでメモをとるようにしている。授業や作業中に気づいたことをメモしたいときは、自由な書き方で空いたスペースにどんどん書き加えたいので、手書きの方がメモを取りやすいという。手書きメモは、後にパソコンで整理しながら形式をそろえてまとめておくというように、手書きとパソコン入力を効率よく使い分けている。

空いたスペースに自由に手書きの言葉を書いていくことで「アイディアを羽ばたかせ」ようとしたり、手を動かして文字にする方が記憶に定着しやすいと感じるから手書きを心がけたりするという姿勢、それらはイギリスの人類学者ティム・インゴルドの「手書きの擁護」に通じるものがある。

もともとは<sup>注6</sup>ダーラム大学人類学科のウェブサイト「越境する文字」(Writing Across Boundaries)に寄稿したこの文章は、近年のイギリスの大学生の基本的な読解力・文章力の低下に対する嘆きと憂いから書き上げたものだそうだ。

インゴルドは、<sup>注7</sup>ケロッグ社製シリアルのパッケージを切り開いて、カードにして束ねてとっておいている(大きさは二十九×二十三センチメートルというからほぼ箱そのままの大きさである)。カードの束は厚く、硬いパッケージの紙は下支えも必要ない上に、厚紙の裏にはたっぷり書けるスペースがあるので、とっさに思いついた考えをつなぎとめておくのに最適なものである。思考はコンピュータの画面を見つめるときだけに働くというものではなく、思いがけないときに、いわんとすることの本質が啓示のような形で凝結することがある。

3

いつもそれを書きとめる用意をしておく必要がある。前日に「X」にして<sup>上</sup>も手くまとめられなかった文の一段落が、頭の中で完璧な形をなして、朝目覚めることがある。そんなときベッドで思い浮かんだ文章を、枕元に用意したケロッグの大きいカードに自由に書きとめる。手書きの文字を記したこれらのカードはきちんと保存しておき、さらに先に思考を進めることができるようになる。

② ケロッグの箱を切り開くという手間をかける代わりにタブレットを枕元に置いておくのでは駄目なのか。この問いに対しては、ケロッグはコンピュータを打ち負かすというのがインゴルドの答えである。なぜなら、文字がまとまって形づくられる単語は、アルファベットの連続した線として紙の上で展開していくからであり、もともと言葉は手と紙のふれあうところから流れ出てく



るものだったからである。英単語を紙に手で書きとることを想像すればわかるように、筆記体の文字を紙の上に正しいスペルで綴ったという感覚を手は記憶しているが、コンピューターはこの流れを断ち切る。

指がキーボードのキーをたたくことと、パソコンのディスプレイに現れるしるし(文字記号)とのあいだに、身体感覚という点で何らつながりはない。ディスプレイに現れるしるしは、手の動きや感覚の痕跡を少しもとどめてはいない。手書きの文字と異なり、それらは表情に乏しく冷たい。パソコンでタイプすることは、喜びは伴わず魂を滅ぼすようなもので、文字から心を剥ぎ取っているのだとインゴルドは嘆くのである。

インゴルドのように筆記体で読みやすい文字を書くことができる人の場合でも、欧米の育児文化の中でアルファベットの大字のブロックを子どもの頃に与えられて文字を覚えて育つのが普通であるという。だとしたら、キーごとに異なるアルファベットの大字を不連続的に打っていくのは、文字の覚え始めにおいて、アルファベットのブロックを触った経験をもとに一つ一つの文字を一つ一つくぎって書いていくことと似通っており、さらにはかつてのタイプライターで一つ一つの文字のキーをたたくことと、大きく隔たっていないように見える。しかし筆記体を覚えたり、手動のタイプライターを使った世代の人にとって、タイプライターのキーのたたきかた次第で印字される文字の濃淡が変化して、たたくことと紙の上のしるしとのあいだに身体的関係が残るとするのは、パソコンのキーボードを打つこととは大きく異なる経験なのだろう。

インゴルドのこの考えは、アルファベット文化圏である欧米よりも、書き順にこだわり漢字や仮名を繰り返し練習帳に書いて覚える習慣を身につけた日本人々には納得しやすいものかもしれない。日本語ワープロソフトを使う場合、多くの人はローマ字入力して変換を行う。頭の中では「練習帳」という漢字三文字の単語が思い浮かんでいるにしても、それを一度ひらがなに置き換え、さらにローマ字に変換する作業を経て、*ren-shu-u-chou*というキーを不連続的に打ちこみ、さらに変換キーを押して正しい漢字の候補を見つけるという作業を行う。手書きする場合には存在しない、漢字一ひらがな一ローマ字という脳の中の過剰な変換と、対応するキーを打つことによって、はじめて「練習帳」という漢字三文字からなる言葉がディスプレイ上に現れる。手と紙がふれあって線の連続が生み出され文字になるという動きは、アルファベットの場合よりもさらにはつきりと断ち切られることになるのである。



かつて、学生が研究のために文献を調べる、その内容の一部を筆写しながら論文の構想を練るというのは、沈黙思考を要求する手間のかかる作業であり、当該学生の全人格を巻き込むようなプロセスであった。しかし検索エンジンの活用やコピー＆ペースト機能の利用などにより、コンピューターはこの複雑なプロセスを一気に短縮した。<sup>③</sup>それは思考それ自体をも短縮することでしかないといンゴルドは批判する。彼は所属するアバディーン大学<sup>注10</sup>の学生に周囲の世界の観察記録を手で書きとめることを求め、同じ作業をコンピューターを使用した場合と比較させてみた。アバディーン<sup>注10</sup>の学生たちは、手書きが抑圧された感受性を目覚めさせ、自ら観察対象に関わっているという感覚をより強く引き起こし、それが深い思考につながったと感想を伝えてきたという。私がこれまで紹介してきた大学とは違う大学の女子学生Dは、保育園の年長時代から祖父のパソコンを使ってアルファベット入力してきたので、ワープロを打つことは全く苦でなく、「難しい文章表現や、格好のよい文章」を書くときはワープロを使用している方が多かった。しかし全く手書きをしないわけではない。

4

 何千字も書かなくてはならないレポートがあるときは、

は、思いついたことや読んだ参考文献の重要な箇所を、必ずノートに手書きで書きとめたり書き写したりしている。自分の考えが全くまとまらないとき、何を論じるか全く頭の中にないとき、「ノートの白い空間がとても魅力的に思える」のだという。紙のノートの白は、その上で手を滑らせるよう誘惑しているかのようなのだ。これはディスプレイの空白の画面に向かうときには全く沸きあがらない感覚である。こうした自身の経験を踏まえ、《 Y 》のではないかと彼女は述べている。手書きするときには、文章に加えて線や図を描き添えることもあるという。それによって、頭の中にあるバラバラな事柄がつながって、新たな考えや答えを見つけ出すのに役立っているように思えるからだ。

インゴルドは、タイプするときにはミスタッチにより頻繁にスペルを間違えるのに対して、筆記体で文字を書くとき、綴りの間違いはほとんどしないという。文字と文字を続けて書く筆記体を繰り返し練習したことによって、手や指が単語を記憶したからといえよう。これも、繰り返し漢字や仮名を書いて覚えた日本人にとって、得心がいくものである。手を動かして文字にする方が記憶に定着しやすいと感じているので手書きを心がけ、覚えておきたいことは手書きで紙に書きのこすようにしていると言った女子学生Cの発言にあるとおりだ。

手書きすることにより、自ら関わるという強い感覚が引き起こされるというのは、先ほどの建築専攻の女子学生Bの手書きで

図面を引くことへのこだわりにも見られることである。

(出口顯『声と文字の人類学』(NHK出版)より)

注1・打ち言葉……「話し言葉」「書き言葉」に対し、パソコンやスマートフォンなどでキーを入力して現れる言葉のこと。

注2・LINE……スマートフォンなどでメッセージのやりとりができるアプリケーション。

注3・スタンプ……LINEなどのメッセージアプリで使われる小さなイラスト。

注4・X……SNSの一つ。旧ツイッター。

注5・CG画像……コンピューターグラフィックス。コンピューターを使って描かれた画像。

注6・ダーラム大学……イギリスの大学。

注7・ケロッグ社……アメリカのシリアル会社。製品は世界一八〇か国以上で販売されている。

注8・タイプライター……印字機。キーをたたくことで、キーの先端についた活字がインクを染み込ませたりボンの上から紙を押しつけ、印字されるという仕組み。手動のタイプライターもこれを指す。

注9・ワープロ……ワードプロセッサ。コンピューターで文書を入力し、編集するシステム。

注10・アバディーン大学……イギリスの大学。

## 問一、

1 4 に入ることばとして適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。(ただし、同じものは使えない。)

ア、あるいは      イ、さらに      ウ、しかし      エ、だから      オ、例えば      カ、ところで

問二、二重線部 a・b と同じ用法のものを次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

a 「に」

- ア、明日は図書館に行こう。
- イ、四月から高校生になる。
- ウ、軽やかにピアノを弾く。
- エ、ついに優勝を果たした。
- オ、空の美しさに感動する。

b 「でも」

- ア、国語だけでもいい点数を取りたい。
- イ、呼んでも返事がないから心配する。
- ウ、たまには音楽でも聴きにいきたい。
- エ、強豪でもいつも勝つわけではない。
- オ、どこでもいいから遊びに行きたい。

**問三、**波線部 A・B の本文における意味として適切なものを次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

A 「あらかじめ」

ア、まとめて

イ、きちんと

ウ、最初から

エ、予定通り

オ、前もって

B 「推敲」

ア、凝らした表現をする

イ、よく考えてまとめる

ウ、言葉を正しく用いる

エ、ていねいに説明する

オ、間違いや不備を直す

**問四、**点線部「はじめて」が修飾する部分を本文中から一文節で抜き出しなさい。

**問五、**傍線部①「女子学生 A は、大学に入学して一人暮らしになったとき、中学時代の友人と文通を始めた」とあるが、そのやりとりから、この二人について筆者はどのようにとらえているか。それがわかることばを、本文中から十八字で抜き出しなさい。

問六、《 X 》 に入ることをばとして適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- 1、初志貫徹
- 2、自画自賛
- 3、疑心暗鬼
- 4、我田引水
- 5、悪戦苦闘

問七、傍線部②「ケロググはコンピューターを打ち負かす」とあるが、その説明として適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、手書きの方がすぐに書きとめられるし、保存も簡単にできるが、コンピューターだけではメモしたものをうまくまとめられないということ。
- 2、コンピューターで文字を打つ作業にはない、手と紙のふれあいによって文字を記すという感覚が、人間らしさを思い起こさせるということ。
- 3、コンピューターの画面を見つめるときよりも、紙を手にしたときの方が、物事の本質がまとまった形で見えてくる可能性が高いということ。
- 4、手書きで文字を記す場合と違い、コンピューターで文字を打つ場合、文字と手の間に身体的関係がないので文字に心が伴わないということ。
- 5、手を動かして文字を書くことは記憶が定着しやすいが、コンピューターを使って文字を打つことは記憶の定着につながりにくいということ。

問八、傍線部③「それ」とあるが、その内容を四十字以内で答えなさい。

問九、《 Y 》に入ることばとして適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、ノートとパソコンを併用すると頭の中が整理される
- 2、手で書くということには考えることも含まれている
- 3、打ち言葉では間違いが頻繁に発生する可能性が高い
- 4、パソコンの画面より空白のノートの方がおもしろい
- 5、常に手書きをして何でも記憶しようとするのがよい

問十、傍線部④「建築専攻の女子学生Bの手書きで図面を引くことへのこだわり」とあるが、これについて説明した次の文の空欄【 1 】・【 2 】に入ることばを、【 1 】は十四字で、【 2 】は十七字でそれぞれ本文中から抜き出しなさい。

著名な建築家のスケッチから、【 1 】を読み取れるように、手書きで図面を引くことで【 2 】を残したいと考えているということ。

問十一、本文の内容と合致するものを次の中から二つ選び、番号で答えなさい。

- 1、手書きの手紙などをもらっても、それに対する返事を打ち言葉ですぐに送ることで互いの関係はより深くなる。
- 2、目的によって手書きとパソコンを使い分けることで、自分の感情を適切にコントロールすることが可能になる。
- 3、手書きでメッセージや手紙を書く者は、手書きは打ち言葉よりも個性や感情を伝えられることに気づいている。
- 4、手書きにおいても打ち言葉を入力するときにおいても、日本語は特殊な存在であるとインゴルドは考えている。
- 5、ノートの白い空間は自由に文字を書けるので、自分らしさを表現し相手に思いを伝えるのに最適なものである。
- 6、手で文字を書くことで身体と文字につながりが生じて、自らが物事に関わっているという強い感覚に結びつく。
- 7、近年の大学生の基本的な読解力や文章力が低いことから、インゴルドは学生に手書きすることを推奨している。

| 得点 |
|----|
|----|

5

|   |   |
|---|---|
| ⑤ | ① |
| ⑥ | ② |
|   | ③ |
|   | ④ |

|    |  |
|----|--|
|    |  |
| 問三 |  |
|    |  |
| 問四 |  |
| ①  |  |
|    |  |
| ②  |  |
|    |  |

CD

|   |  |
|---|--|
| 1 |  |
| 2 |  |
| 3 |  |
| 4 |  |

|    |   |
|----|---|
| 問三 | a |
|    | b |

[illegible]

問六

11

[illegible]

7

【附】

|    |   |
|----|---|
| a  | 1 |
| b  | 2 |
| 問三 | 3 |
| A  | 4 |
| B  |   |
| 問四 |   |

[illegible]

問七

[illegible]

10

[illegible]

|  |  |
|--|--|
|  |  |
|  |  |

得 点